

平成 27 年 3 月 2 日

京口門だより No. 17

桃の節句の 3 月を迎えれば、ようやく暖かさがおとずれると思うのですが、さていかがなものか。

最近の新聞で、「薬の効かない菌が世界で拡大」というニュースを目にしました。イギリスの首相のきもいりで、薬剤耐性菌の調査をしたところ、薬剤耐性菌による死者数は 35 年後には現在の 14 倍にあたる 1 千万人になろうという内容でした。特にアジアが最も多いということだそうです。世界的な新たな対応が緊急に必要であるとされています。薬剤耐性菌のことはずいぶん昔にすでに警告する医師がいて、京都の林良材先生はペニシリンが開発され、これで多くの細菌感染症が克服できるといわれていた時代に、使いつづけているとペニシリンに抵抗する細菌がかならず生まれ、菌交代現象(抗生物質に抵抗する細菌が新たに生まれる)がおきると注意をされました。昭和 20 年代のことですばらしい先見の明がありました。そんな忠告にも耳をかさず、ある細菌に効かなくなると、次から次へと新しい抗生物質を開発し続けてゆき、細菌の抵抗と抗生物質の効力とのイタチごっこというやっかいなことになり、ついにどんな抗生物質にも効かない細菌(メチシリン耐性黄色ぶどう球菌や多剤耐性緑膿菌など)が出てきました。つまり細菌との戦いで抗生物質が敗れるという状況です。どうしてそのようなことになったのかと言えば、やはり抗生物質の使いすぎということでしょうが、もうひとつは副作用を恐れて、勝手に量を減らしたり、休み休み服用したりするようないい加減な使い方にもよると言われます。

抗生物質を使いすぎるなどいわれても、細菌に感染したら使わざるをえないのが現代医学です。しかし、重篤でない細菌感染症には漢方薬が効果を発揮します。たとえば、風邪から気管支炎というとすぐに抗生物質ですが、うまく漢方薬を使えば咳も痰もおさまり、重症の肺炎にいたるのを防ぐこともできます。急性膀胱炎は必ず抗生物質を使うと決めています。漢方薬にはこのような時に使える薬があります。皮膚などの化膿症(オデキなど)も初期には漢方薬が効果をあげます。抗生物質などなかった時代に、さまざまな感染症にたいして漢方は苦勞と工夫を重ねて治療法を見出してきました。漢方薬は細菌に対する殺菌作用は強くありません。せいぜい静菌作用くらいで、それよりもわれわれのからだ自身のもつ細菌への抵抗力(免疫力)を増すと考えられます。少し遠回りのようにもみえますが、案外効果を発揮します。とくに慢性の感染症にダラダラと抗生物質を使い続けるくらいなら、漢方薬を有効に使ってゆけばよいのではないかと思います。

